

## 作家 角田光代さん講演

京都大人文学研究所主催の「文学カフェ」がこのほど京都市左京区の京都大で開かれ、直木賞作家の角田光代さんが講演した。角田さんは「私にとって小説を書くことは社会とかわかること」と、自らの創作の原動力について語った。

エッセイストの千野帽子さん、人文研の岡田暁生准教授との座談会形式で行われた講演で、角田さんは約20年の執筆活動を振り返りながら、「小説を書くきっかけは怒りや疑問」と述べた。母性をテーマに誘拐犯の女や子どもの葛藤を描いたベストセラー「八日目の蟬」も、「母性に対する社会の圧力を考えることから始まった」と説明した。

個性的な人物設定や複雑な心理描



## 「小説書くことは社会とかわかること」

写に定評があるが、「（八日目の蟬の主人公）希和子もそうだが、キャラクター作りでは自分が嫌いな人を想定して入れる。なぜ苦手なんだろう、自分にも似たところがある」などと二歩引いて考えられる。年齢を重ねるにつれ、心理をねちこく書くようになった」と、創作のポイントの一つを明かした。

また、「昔は文学の世界は文体こそすべてと言われた。文体って何だろうと考えても分からなかったの、私は『いや』と。一文を見ても誰が作者か分からない無個性の文章を心がけている」と自身の作風を語った。

一方、文学の現状については、難解で複雑な作品が敬遠され、単純明快な世界が優先されがちな風潮に疑問も投げかけた。「バブル経済崩壊やオウム事件などで世の中が暗くなり、簡単にハッピーエンドや希望を描き、人生を肯定するような作品が増えた。現実が訳分からなくなった分、みなフィクションに分かりやすさを求めている」と指摘した。

そのうえで、自作について「20代の作品は絶望寄り、厭世的すぎると言われた。今の時代、希望は必要だが、安易な希望ではなく、自分が信じられる等身大の希望を書いていきたい」と意欲をみせた。

（佐久間卓也）